

ポストパーク
—居場所を生み出す新たな都市インフラ—

22119043 横田 梨紗子
指導教員 宮 晶子 教授

空間体験の共有 郵便局 縮みの文化
都市インフラ 街区公園 周縁性

1 研究の背景と目的

都市空間は元来、地域の人々が集まるコミュニティが生まれたり、体験を共有することによって都市に愛着を持つことができる豊かさを持っていた。しかし、現代の日本の都市は自動車を主体とした開発が進んだ結果、都市空間での利便性の高まりと共に人の居場所は失われ、都市を歩く人々はメディア空間に遊離することによって実存空間の体験が乏しくなっているという現状が見られる。また、日本人は広場文化に馴染みがないことから、海外と比べて都市の公共空間で見られる行為が閉鎖的である。

これらのことから、本制作では空間体験を共有しあうことで都市に愛着を持ったり、都市の中で自らの居場所を創り出すきっかけとなるような都市インフラのプロトタイプを、街区公園を敷地として提案する。

2 居合わせる空間

2-1 空間体験の共有

空間体験の共有とは、間身体性にに基づき、他者と居合わせて「見る」「見られる」といった能動と受動が交差する空間を共有することで、自己と他者の実存を知覚し同じ世界に属していることを認識することである。(図1) 間身体性とは、メルロ＝ポンティによると、同じ一つの身体が「触れる」と同時に「触れられる」と感じることによって、自己の身体を再帰的に知覚すると同時に知覚を把握することを意味している。(1)



図1 間身体性

2-2 お花見空間

日本の伝統的な文化であるお花見が行われる空間を分析すると、場を選択して自分のモノとしたり、靴を脱いでくつろぐというように、人と居合わせながらも自由なふるまいが見られることが分かる。(図2)

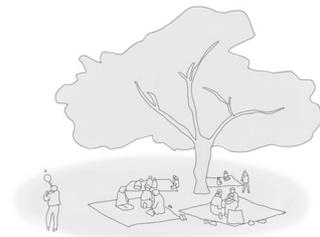


図2 お花見空間の様子

お花見空間は場を共有することでコミュニティが生まれ、空間体験の共有が発生する事例である。このような空間体験の共有はイベント的には発生しているものの、都市空間において日常的に見られる場面は少ない。そこで、都市の中で日常的に空間体験を共有し、居合わせる空間を設計することによって、人々の結びつきが強くなり、レジリエンスを高めるといったことが期待される。

3 日本特有の文化と空間

3-1 “縮み”の文化

李御寧氏が論じた日本特有の文化として“縮み”の文化がある。これは、抽象的な拡がりの世界を具象的なひとつの型に縮小しようとする志向を持つことを意味している。(2)例として、要的な凝縮力を持って縮める扇子や、自然を再構成し縮小している空間である日本庭園が挙げられる。(図3)

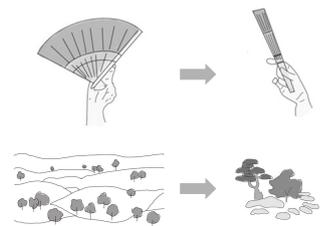


図3 縮みの文化

また、茶室という狭い空間で空間体験の共有を楽しむ寄合文化が表すように、日本では触覚言語によるやりとりが重要視されている。このことから、大集団ではなく5～6人のスモールグループを形成する空間の方が居心地良いと感じる傾向にあることが分かる。

3-2 内外の領域性

日本人は集団帰属意識の高さから、内外の領域性を強める傾向にある。ウチとなる空間では自由で開放的なふるまいが見られるが、ソトとなる空間では他者の関与を妨げ、閉鎖的なふるまいが多くなる。(図4)

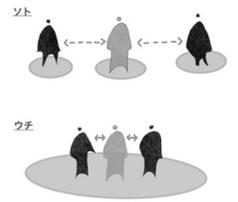


図4 集団帰属意識

4 都市の中での居場所の創出

4-1 郵便局の公共性

分析を踏まえて、縮み方向にある日本人が空間を自分のウチとして認識し、自由にふるまうことのできる居場

所が日本の都市空間において必要であると考えた。このような家でも職場でもない、新たな居場所となる都市インフラを設計するため、全国に公平なネットワークを持つ地域施設である郵便局を中心にコミュニティが広がることを計画し、提案を行う。郵便局は全国に遍在しているため、全ての地域の人々にとって身近な施設であると共に、物流の拠点としての機能を持つという特徴がある。

4-2 街区公園というインフラの活用

都市の中で居場所を創出するため、街区公園を敷地として、郵便局の再配置を行う。街区公園は全国の都市公園の約8割を占めており、地域住民にとって身近な居場所として機能するインフラである。しかし、各地の街区公園は機械的に名称がつけられていたりとそれぞれに個性がないことが多い。そこで地域住民のコミュニティ、そして物流の拠点として機能する都市インフラ“ポストパーク”として再計画することで、街区公園が都市のセンターとして機能し、更に地域にアイデンティティを与える存在となることが期待される。

4-3 ポストパークのプログラム

郵便局を中心とし、クリーニングショップ、生鮮食品店といったモノを介した生活必需行為に基づく機能を集約させるポストパークの提案を行う。オンライン上ではできないモノの受け渡しが発生する行為を機能として配置することで、人々が日常的に訪れる施設になるとともに、物流の拠点としての役割を果たす。ポストパークは老若男女問わず地域の人々が集い、体験を共有する居場所となり、都市生活を豊かにすることが予測される。

5 設計提案

5-1 敷地

郵便局の再構成を行うプロトタイプの提案を行うにあたり、例として神奈川県横浜市青葉区を対象として取り挙げた。公園が多く緑豊かな住宅街が広がっており、ファミリー層から高齢者まで幅広い年齢層の住民がいるという特徴がある。

5-2 提案手法

横浜市青葉区内に現存する23の郵便局と、197の街区公園を分類・再配置し、構成を行う。街区公園は接道面と面積によって分類を行い、接道面が1面・2面・3面の公園では、接道部の敷地を取得して設計する提案とし、4面の公園では公園内の一部を敷地として活用することで、公園での活動を眺めながら周縁的に広がる空間を設

計する。今回は、青葉区内の接道部が1面・2面・3面・4面それぞれの街区公園を敷地として提案を行う。

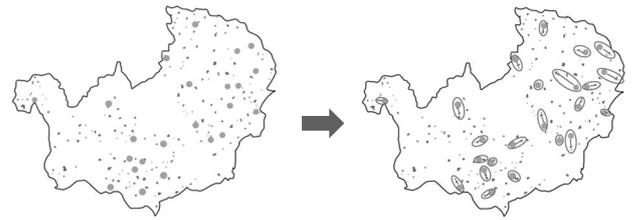
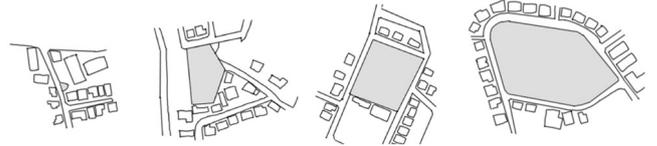


図5 現在の郵便局と街区公園

図6 再配置した郵便局



美しが丘第九公園 大場衛門ヶ谷公園 美しが丘西よもぎ公園 あざみ野一丁目公園

図7 今回敷地として提案を行う4つの公園

6 設計手法

6-1 空間体験の共有を可能とするスケール操作

日本古来の尺貫法を用いて、2畳・3畳・4.5畳・6畳・8畳・12畳のスケールを組み合わせることで設計を行う。(図8) 縮みのスケールによって居心地の良さを感じられる。また、これらのスケールの重なりが両義的に認識されることで、同じ空間にしながら小さな居場所が生まれ、空間体験の共有を促す。

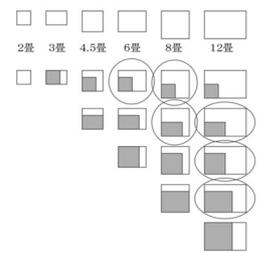


図8 スケール操作の一覧

6-2 お花見空間の建築化

お花見空間のような、一つ木の下にしながらそれぞれの居場所を形成していることで生まれる空間体験の共有を建築化するため、一本の柱を中心にスケールが広がる構成とする。また、桜の木の子な樹形三つを取り入れた屋根の形状とすることで、住宅街と公園との連続性を持つ建築となる。

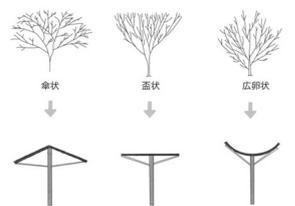


図9 桜の樹形と屋根の関係

主要参考文献

- (1) 船木亨『メルロ＝ポンティ入門』, 筑摩書房, 2003
- (2) 李御寧『「縮み」志向の日本人』, 講談社学術文庫, 1816
- (3) 加藤周一『日本文化における空間と時間』, 岩波書店, 2007